海外留学レポート

海外留学レポート

ボルドー大学第1脊椎外科を訪ねて

大阪医科大学　整形外科学教室　助教　　藤城　高志

2016年6月から2018年5月の間、フランスはボルドー大学第1脊椎外科で研修させていただきました。この度、留学レポートを寄稿させていただく機会を頂戴しましたので、ご報告いたします。

ボルドーはフランスの南西部にあり、大西洋まで車で約30分、スペインとの国境まで約2時間というロケーションです。冬は日本ほど厳しくはありませんが、雨が多く、こちらの人々にとって家で家族と過ごす季節だそうです。夏は非常に乾燥していて、暑くはありますが日陰に入れば非常に涼しく、夜は10時頃まで明るく、公園は日光浴する人で溢れかえっています。

市内の3つの大聖堂の他、ガロンヌ川沿いのブルス広場や水鏡を中心とした景観も世界遺産に登録されています。その市内を走るトラムはA線からC線の3路線があり、美しい町の景観を損なわぬように通電のための架線がなく、町のシンボルのひとつとも言えます(写真1)。私たちは、Jardin Publicという大きな公園の近くに住んでおり、アパートの目の前の通りの奥にはQuinconces広場のジロンド派記念碑を眺めることができます。アパートの斜向かいには教会があり、日中は30分毎に鐘が鳴ります。アパートの前の通りには、2019年からトラムのD線が開通することになっています。

皆さんご存知の通り、ボルドーと言えばワインで有名です。スーパーマーケットには多くのボルドー産ワインがならび、郊外にはブドウ畑が広がっています。また海も近く、秋から冬にかけては町のいたるところで牡蠣の露店が並びます(写真2)。ちなみに、フランス(ボルドー?)では牡蠣は必ず生食し、焼いたりフライにするという概念はありません。

写真1

写真2

ボルドーでは日本とは違うおいしいものがたくさんありますが(しかも安価で)、“サンドイッチ”に勝るものはありません。日本で想像する“サンドイッチ”とは違い、固いバゲットにハム、チーズ、トマトを雑然と挟んだもので(写真3)、学生やインターンが昼食によく食べています。最初フランスに来た時、“なんとも味気のないものを食べもの”と思っていたのですが、小腹が空いた時やどこかに出掛ける時などに食べ続けていると、自分たちの生活になくてはならないものになってきます。習慣とは不思議で恐ろしいものです。日本に帰ってきた今では、“あのサンドイッチ、もう一度食べたいね”とことあるごとに言っています。

Bordeaux University Hospital Spine Unit 1

Jean-Marc Vital教授が主催するこの教室は(2017年からVital教授は退官され、現在はOlivier Gille教授が主催)、3人の教授、5人の外科医、そして半年毎に入れ替わる5-6人のイン

写真3

ターンで構成され、年間約2000件の脊椎手術が行われています(写真4)。ボルドーと言えば、脊椎矢状面アライメントのメッカであり、派手な脊椎変形矯正手術を思い浮かべるのですが、行われている手術は、椎間板切除、腰椎後方除圧固定、頚椎前方固定が大半を占めています。脊椎外科において、ここはフランス国内でも名門中の名門であり、インターンもこの病院に配属されることを皆誇りに思っています。そしてものすごくハングリーです。それは“早く一人前の外科医になりたい”ということなのですが、教授の前立ちでも彼らは一歩も引きません。見ているこちらがヒヤヒヤしてしまうほどです。また、常に数名の留学生が在籍しています。チリ、アイルランド、ポルトガル、アルゼンチン、インド、南アフリカ、モロッコ、アルジェリア、ニュージーランド、など、世界中から留学生が集まってきます。

写真4
ボルドー大学第１脊椎外科　カンファレンス後の一コマ

Ibrahim ObeidとLouis Boissière

そんな中で、複雑な脊柱変形を担当しているのは、Ibrahim ObeidとLouis Boissièreの2人です。彼ら2人は今まで私が見た外科医とは全く違う次元の手術をします。側弯症を含めてPedicle Screwの刺入はもちろんのこと、骨切りの場合にも全く透視を使いません。そしてどちらも頭が非常に良く、さらに手術や研究など、何かにつけて面白いアイデアを持っています。

成人脊柱変形の手術においては、Pedicle Subtraction Osteotomy(PSO)やVertebral Column Resection(VCR)などの椎体骨切りをガンガンやっている印象でしたが実際はそうではなく、後方椎体間固定にPonte骨切りやSmith Perterson骨切りをうまく組み合わせて矯正を行っていました。Obeid、Louisどちらに聞いても“椎体骨切りは合併症も多いので、できるだけそれを使わずに手術を計画している”とのことで、椎体骨切りは彼らの得意とするところと思っていましたが、その適応は非常に慎重であったのが印象的でした。

Obeidはものすごい速さで手術をしますが、手が何本もあるかと錯覚してしまうほどで、助手をしているこちらがついていくのがやっと、という感じです(写真5)。週に1-2度、プライベートクリニックで彼の手術に助手として参加していましたが、これが大変貴重な経験となりました。Obeidは非常に気難しく厳しい人で、渡仏した当初は手術の介助も何から何までダメ出しされて大変でしたが、時間が経つにつれて色々教えてくれるようになりました。彼はとんでもなく複雑な手術をしますが、教えてくれることはいつも非常にシンプルなことばかりでした。私がボルドーを去る時、“どんな難しい手術も、ひとつひとつのステップを完璧にこなせれば、絶対にやり遂げることができる”というメッセージをくれましたが、彼の手術、そして教えてくれたことは、まさしくその一言に集約されており、とても感動したのを覚えています。

LouisはObeidのとって“弟子”的な存在で、長年彼の下で手術を教わってきたそうです。彼も非常に手術が上手で、しかもObeidとそっくりな手術をします。しかしObeidとは対照的(?)に、Louisはいつも明るくニコニコして、皆から愛され

写真5

る存在でした(写真6)。私は“成人脊柱変形の手術適応を作る”ための研究の一部を担当していましたが、Louisとは研究について多くのDiscussionをかさね、大きな助けとなったとともに、彼らのリサーチマインドを知ることができ大変勉強になりました。

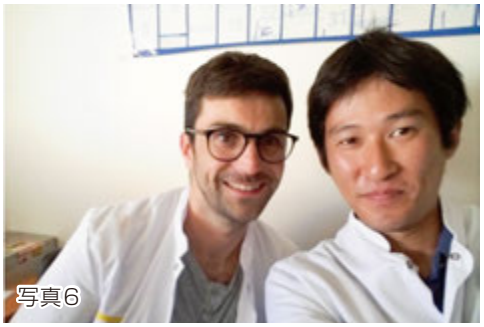


写真6

フランスでの生活

2016年5月、まず私が単身で渡仏し、銀行口座の開設、住居、子供が通う学校など、生活に必要な契約を行いました。とにかく、まず銀行の口座を開設しないと何も始まらないのですが、これには多くの書類とサインが必要な上に時間も非常にかかる作業で、とても苦労しました。フランス(恐らくヨーロッパ全域において)では、移民の問題でEU圏外の人間が生活に必要な手続きを行うのは非常に難しくなっているようです。しかし担当してくれたCazalaさんは非常に親切な人で、彼女のお陰で今フランスで生活できたと言っても過言ではありません(写真7)。口座開設後も、銀行とは関係ないことでも私たち家族をサポートしてくれていました。

フランスにやって来た当初は、生活していくだけで精一杯です。“わからない”だけならまだよいのですが、その上に、電気、水が止まった、車がなくなった、裁判所から保険の未払金の支払い要請がきたなど、多くのトラブルにも見舞われます。しかし、こういうことにもだんだん慣れてきます。

なぜ慣れてしまうかというと、それは良く言うとフランス人の“懐の深さ”、正確に言うと“いい加減さ”のためです。とにかくフランス人は“時間通りに仕事をする”とか“正確に仕事をする”ということがほとんど無理ですが、逆にこちらもそれを強要されることもありません。生活全般においても、日本で

写真7

受けるようなサービスを期待すると大変落胆することになりますが、3か月も生活すると全く期待しなくなり、逆にその“遊び”の部分を楽しむようになります。

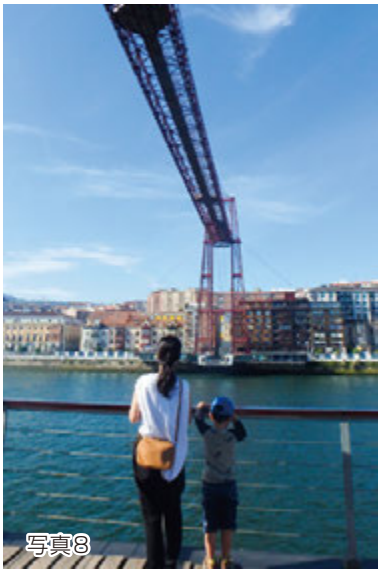
その最たる例がバスです。一応時刻表はありますが、今まで時間通りにバスがやって来たことは一度もありません。また、バスに乗ったのに運転手が近くのスーパーに買い物に行ってなかなか発車しない、なんてこともよくあります。しかし、バスやトラムは予め回数券を買って乗車後にチケットを検札機に通しますが、その検札機が壊れていて、運転手に“今は壊れてるから、チケットは通さなくていいよ”と言われ、結局タダで乗れてしまうこともしばしばです。万事がこんな調子です。

息子の学友や妻の友達の家族から家に招待されることも多く、そこからも色々なことを学んでいます。民族紛争、イスラム教やユダヤ教などの宗教のこと、アフリカでの政治問題など、日本で生活していれば全く知らなかったことを色々考えるようになります。またそれだけでなく、彼らは日本のこともよく知っており、彼らから日本のことを学ぶこともしばしばあります。公園で知り合ったセルビア人家族は、“コソボ紛争の時、日本は私たちに経済援助を含めて色々なサポートをしてくれて感謝している”と言って、手厚くもてなしてくれました。またアルジェリアの男性は、“戦後、日本が経済大国になれたことを、アフリカの人たちは皆respectしている、君たちは本当に凄い国に住んでいる”と話してくれました。

最初は自分たちの生活だけで精一杯だったのが、半年も経つとどこかに出かけたくなります。フランスでは、2月に1度、2週間の休みがあり、さらにバカンス時期(日本での夏休み期間)には2か

月の休暇があり、皆それを楽しみにしています。しかもこれは子供達だけではなく、皆がこの時期に休みをとるため、病院も含め町中は定期的に閑散としてしまいます。私たちもこのフランスの風習に習い、家族で色々なところに旅行に出かけました。

ボルドーはスペイン国境からも近く、2〜3時間あればバスク地方へ行くことができます。我々日本人にとって、地続きの国境を跨ぐだけで、高速道路の制限速度が変わったり、“Merci”が“Gracias”になるのは不思議な感覚です。スペインはヨーロッパの荘厳な雰囲気の中に(ジブラルタル海峡を挟んでアフリカ大陸と面しているからだと思いますが)、エキゾチックな雰囲気を街のいたるところから感じることができます。私たちには2歳と5歳の子供がおり、フランスでは子連れでレストランやビストロに入るのは非常に敷居が高く感じます。しかしスペインのバルは子連れで賑わっており気兼ねなく食事することができます。この留学中、幾度となくスペインを旅し、我が家にとってスペインはもう



ビルバオ
ビスカヤ橋

パンプローナの美しい街並み

マヨルカ島　世界一美しいと言われるEs Trencのビーチ

一つの留学先、といったところでした(写真8・9・10)。

最後に

日本の脊椎外科の診療では、“神経の除圧”や“不安定性を固定する”というのは2つの大きな手術治療の概念です。フランスの脊椎外科においてはこの2つの上に、“矢状面アライメントを矯正する”ことも非常に重要な概念でした。そして、この矢状面アライメントの考え方はもちろん今に始まったものではなく、フランスとその脊椎外科の歴史に脈々と流れてきたものと感じられます。現在、この脊椎矢状面アライメントとその矯正手術は、脊椎外科分野において世界中でひとつの大きな潮流となっていますし、まだまだ不明な部分が多く最終的な答えは導き出されていません。しかし、もしこのブームが終わっても、彼らは“矢状面アライメント”を追求し続けるでしょう。それが何故かと問われると、私の語彙力では答えることはできませんが、今はそれが“文化”というものなのだと認識しています。

謝辞

この留学・渡仏に関して協力していただいた当教室講師 藤原憲太先生、そして2年間という長い留学を許可してくださり、“思いっきり遊んでくればいいよ!”と送り出してくださった根尾昌志教授に改めて深謝いたします。そして最後に、この留学期間様々な手続きや身の回りのこともフランス語を駆使して私を支えてくれた妻と、異国の生活も全く臆することなく、そして元気に帰国してくれた息子たちに、この場を借りて“ありがとう”と伝えたいと思います。